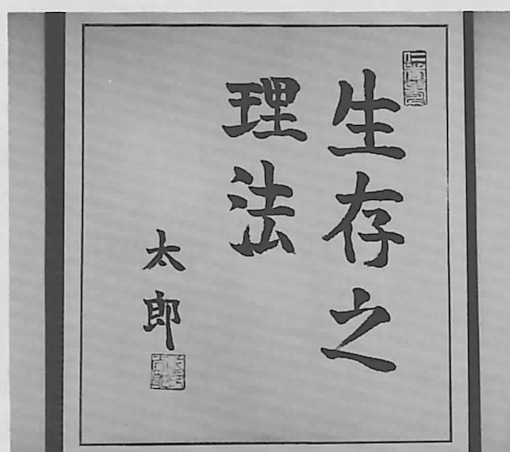


生存科学研究所

ニュース

Vol.4. No.6.

1989.11.10発行



目次

- | | |
|---|---------------------------|
| ● 巻頭言「生存と競争」宮島龍興…………… 1 | ● 生存科学ビューポイント……………10 |
| ● 第47回生存科学研究会「地球環境と生存科学」
向山定孝… 2 | ● エッセイズ・キュート……………10 |
| ● 武見フェロー研究報告「開発途上国における病院
プロジェクトの課題；ポリビアの事例研究から」
上原鳴夫… 4 | ● 維持会員だより……………11 |
| ● 市原市「市民の健康づくり計画」シンポジウム …… 5 | ● ニュース・オブ・ニュース……………13 |
| | ● 公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース…14 |
| | ● お知らせ……………15 |
| | ● 編集後記……………15 |

発行：財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1
聖書館ビル303

電話 03-563-3518

このごろ世の中では、人類の進化について、あまり真剣な議論がされなくなったようである。もちろん、産業、経済活動とか、技術とか、スポーツとか、学術とかで、はげしい競争が行なわれ、それによって進歩が促進されている例はいくらでもある。しかし、それだから人類は進化しているといつてよいだろうか。これについては、もっと議論する必要があるはしないか。

進化とは本来環境によく適合するようになることであろう。昔は天敵に打ち勝ち、きびしい生活条件にたえる手段を工夫し、食料を多く手に入れるというようなことで、人類は強くなることができた。要するに道具、技術などにより人の能力を強化し、集って力を合わせて他の集団や動物たちに当って優位に立ち、繁栄することができた。つまり環境によりよく適合するようになったのである。これは別に遠い昔のことではなく、戦後の日本の繁栄も、高い教育の普及、相互に助け合う仕組み、能力をひき出す人間関係など色々の要因が社会のレベルを上げたことによる。

しかし、同じ要因が必ずしも環境に適するとはいえない多くの事態を発生させてもいる。それには国内のあり方と、国際社会の中の日本のあり方の両方がかかわっている。

たとえば、ところかまわず、あきカンをなげすてる人がいる。タバコの投げすてや、たき火の不始末で山火事をおこす人がたえない。いい加減な事を言って、人に不安をいだかせる。一たん生まれた不安は消しにくい。

ちがった意見が活発なのはよいが、調整されずにけんかになって、力がそがれる。常識はずれのごく少数の人たちが、すべての人に迷惑をかけ、大へんな損害を与えるなど。今のところ、日本の体力を弱くする程ではないようであるが、技術や情報が高度化、高速化し、社会の仕組みにデリケートな調和が必要になると、わずかな毒物も全体の死滅をおこしかねない。この事態を予防するには、わずかな非常識や不調和も日本を根底からだめにするこゝとがありうるというような理解力を一億の日本人が残らずもつことが不可欠である。更に人間活動がひきおこす自然、生物、環境の悪化、破壊などのように、常識はあっても、専門的な理解がむずかしかったり、専門的な学問が十分進んでいなかったりして、大ていの人には分りにくいが、分らないからといって行動しないているわけにはいかないというような事柄も多い。こういう日本の社会内部の問題をうまく処理して、日本の文化、文明を高めるのが、日本としての生存競争であろう。

しかし、事は日本が生き残るだけではすまない。地球が小さくなって、世界中が緊密に高速に結びつけられると、人類が地球の生物と協力して、繁栄するという地球規模の課題を地球規模の協力により研究し、施策を実行しなければならぬ。これは互いに競争しながら調和を求め、地球の生物社会の体質をつよくする問題になる。まさに人類のセイゾンの理法というものであろう。

平成元年9月30日(土)午後2時より、国立がんセンター内国際研究交流会館で開催された第47回生存科学研究会は、「地球環境と生存科学」シリーズの第3回で、講師は向山定孝工学博士。向山氏は応用化学を専攻、東レ(株)愛媛工場長、副社長をへて、(株)日本科学技術研究所代表取締役、科学技術庁専門委員も務められた。なお、当初予定されていた農村生活総合研究センター専務理事、矢口光子女氏の「地球環境の変化と文化」は講師の御都合により変更され、上記のようになった。向山講師は、日本の公害とそれへの対策を現場から見た経験をもとに以下のように講演された。

* * * *

本日の話は「体験的環境談議」として聞いていただきたい。地球上の生物は互いに自然と協調して生きてきた。人間も農業時代は自給自足で環境をあまり壊さないでやってきたが、産業革命以来大規模な工業化で資源を消費し、しかも必要なものだけ取って不要なものは外に排出し、基本的に環境のバランスを乱す方向に進んだ。経済学でも環境汚染による社会的損失は製造コストに入れないで社会的費用とみなしてきた。然し産業の拡大に従い、工場から排出される廃棄物は増大し、自然浄化作用では対処できなくなり公害が発生した。足尾銅山等製錬で出る亜硫酸ガスが公害問題の始まりであるが、然し人間への被害は局所的で排出物を人家からはなして速やかに拡散して対処してきた。処が戦後

の水俣病を始めとする公害事件は多くの人命を損う悲惨な規模の大きな事件であった。産業の高度成長期にあたりきびしい公害対策基本法が制定され環境庁も発足し産官あげての対策がとられた。水銀やカドミウムによる公害は、排出時は希釈され検出されないが、食物連鎖で魚介類の体内では数千倍に濃縮され慢性の中毒症として現われた従来にない現象であった。丁度その頃、DDT等農薬による地球汚染の問題を提起したアメリカのカーソン女氏の「沈黙の春」で述べられた現象であって、世界的な風潮として化学物質の規制が論議された。特に日本では水銀法ソーダの禁止や特別化学物質の規制等他国に例のない厳しい対策がとられた。幸に結果として日本では公害防止の新しい技術が開発され、今ではそれを国外へ輸出できるようになった。

大気・水等環境状況は全般的に改善されている。しかし一時大きく騒がれた魚の中の水銀やPCB等も今でも微量には存在し、更に人体にもDDT等かなりの量含有している例もあって、長期的な健康への影響もまだ解らず懸念され、これは明確にする必要がある。今迄天然に存在しなかった人工的なもの、特に安定的なものをばらまくのは危険で食物連鎖で生物に蓄積され広範囲の地球汚染につながる。わが国ではPCBを始め9種の化学物質が使用禁止や規制されているが、世界的に化学物質の規制が企みられている。一方開発途上国ではDDTを止めたら蚊が増えマ

ラリヤが増えた等で議論があつて農薬等の規制にはむつかしい問題もある。

最近では安定なものではないが、ハイテクで使う有機溶剤等地下水に入ると問題がある。殆どが発癌物質といわれるが、これからも色々出てくるであろう。更に加工食品が増えたが、それへの防腐剤や色、匂等のための添加物も問題である。農業で収穫量を上げるために使う化学肥料や農薬も、土壌中の微生物を減らすのでエコロジ的に問題である。農業では害虫駆除に、ミバエ退治のための不妊化した雄を放つ等、生物を使う方法の開発が要望される。食品、穀物の殺虫に使うエチレンブロマイド等は発癌性があり規制されたが、他の薬剤についても注意を要する。ガンマ線による放射線殺菌は医療機器などに使われているが放射能は残らず、注意して使えば良い方法であろう。フロンガス問題は今年に入って急に大問題化した。代替品の開発とか、半導体摩擦の関係とか、政治的な話題も取沙汰されている。更に大気中の炭酸ガスの増加による地球気象の影響については以前から言われていたが、今年になりサミットにも取上げられ政治問題となった。地球の気温は色々な条件で変る。その影響は確認がむつかしいが、早期の対処が必要とされアルシュサミットでは規制を打ち出し、エネルギー効率の上昇や省エネ、原子力の見直しに言及している。日本はGNP当りのエネルギー消費が少くこの点先行している。長期的には各国協調した対策が必要で、或は経済成長の減速が必要かもしれない。既にエネルギーを使う権利の売買も議論されている。3万年以前の石炭期には炭酸ガスは現在の3倍以上あり植物が非常に繁茂していた事実

があり、炭酸ガスが増えれば植物の成育が良くなるという説もある。長い時間をかけての自然の変化ならそうかもしれないが、人間活動による早い変化には対応し得ないであろう。熱帯雨林の破壊は深刻な問題であるが、その基本は人口増加の圧力と住民の貧困にある。先進国が手を貸し貧困と環境悪化の悪循環をたち切る必要がある。生活が向上すれば先進国の例に見る様に人口の増加を減少さす可能性はある。

エコロジーの論理は因果関係の輪を完結された形から出発する。現在は人間活動による物質の循環が地球上の自前の物質循環にのらない処に問題が起っている。人口の指数関数的増加が止まらなければ悲劇的である。地球上の収容人口には限度があり、現在のエネルギーや物質の使用増加では行き詰まってしまう。「足を知る」必要がある。ローマクラブは資源の枯渇を訴えた。今は環境の汚染が問題である。地球の変化から見れば人間活動の影響等大したことはないかもしれないが、人間の生存環境としては大問題である。有限の宇宙船地球号の将来には、物質エネルギーを使わず文化を発達させた江戸時代の生き方は参考になるのではあるまいか。

(文責・編集委員)

●武見フェロー研究報告

「開発途上国における病院プロジェクトの課題 — ボリビアの事例研究から」

上原鳴夫

9月30日の第47回生存科学研究会において、最近ボストンから帰朝された、ハーバード大学武見講座の昭和63年度武見フェロー、上原鳴夫氏が、武見講座での研究成果を報告された。上原氏は、国立医療センター国際協力部所属の医師で、日本の途上国援助により建設されたボリビアの病院の果たしている機能と問題点を克明に分析され、国際医療協力のあり方を検討し、地域のニーズの分析に立った運営が必要である、と提言をされた。その要約を以下に掲載する。

* * * *

アルマ・アータ宣言から10年を経過して、今再び途上国における病院の在り方が問い直されている。その背景には、(1) 国によってはいまなお病院医療が先行して予防医学やPHC（プライマリー・ヘルスケア）計画が停滞していること、(2) 疾病構造が変化しつつある国・地域（中南米など）では、PHCをバック・アップする病院医療が必要となりつつあること、(3) 多くの途上国で病院・機材が老朽化し、改築・更新の時期にさしかかっている、などの事情がある。

病院の改築や新設は、外からの援助で行なわれることが多いが、しばしば被援助国にとってその運営・維持費が大きな財政負担となっている。先進国の近代病院医療は資本集約的で、設備のみならず、高価な薬・消費資材（フィルム、検査試薬等）と多くの医療専門職に支えられているため、低開発国では、限られた医療資源を占有し、また、支払い能

力の無い一般住民を遠避ける結果となりやすい。しばしば見られる、先進国で教育を受けた医師が主導する病院プランは、先進国の“医療の質”が目標になりやすいが、近年の医療技術開発は、途上国の主要疾患の治療を意図したのではなく、ストラクチュアは追い付いても、アウトカムで必ずしも有効ではない。

医療の“質”の向上と“公共サービスの財政自立”のジレンマに対処するためには、病院プロジェクトの要請は、“最新医療技術を備えた病院施設”ではなく、“病院を含む地域医療システムの再編”と読み替えられなければならない。限られた医療資源の効果を最大化する地域医療戦略の形成がまず重要であり、これに基づいて、対象地域住民と対象疾患を明確にした上での病院の受け持つべき役割が特定される必要がある。目的意識的な疾病分類、適性技術の選択と開発、マネジメント技術の移転、PHCとの効果的な役割分担と連携、医療費の徴収システム、部品供給・機材修理などの後方支援システム、医学教育や医師のインセンティブの構造の見直し、私的医療機関や民間医療との協調など、途上国の地域医療システムの再編のためには多くの研究課題が残されているが、病院プロジェクトが機能するためには、対象地域の保健医療ニーズの実態把握と、地域の視点を持った推進主体の存在が、前提として不可欠と考えられた。

●生存科学研究所主管シンポジウム

市原市『市民の健康づくり計画』

生存科学研究所は、千葉縣市原市の委嘱を受け、8月から9月にかけて3回市原市でシンポジウムを開催した。市原市は関東で横浜市に継ぐ第2の広大な土地を持ち、石油コンビナートを始めとする工業地域と、広々とした農山村地域と、それに挟まれた市街地を揃え持ち、日本の縮図のような地域である。生存科学研究所は、市民の健康作りのために総合的に網羅された「健康づくり計画」を策定しようとしている市原市の熱意を高く評価し、それに協力し市原における優れた地域包括医療システムのモデルを作り出すことが、日本全体の健康作りのための素晴らしいモデル作りにもなり、人類の生存秩序確立と福祉実現に貢献できると考え、それは研究所の重要な研究課題であり、研究所の総力を上げて取り組んだ。以下に3回にわたるシンポジウムのプログラムと概要を紹介する。



市原市「市民の健康づくり計画」シンポジウム 『健康福祉都市としての市原市の確立のために』 プログラム

第一回 「地域住民のライフステージにおける健康づくり」

平成元年 8月24日(木) 午後2時～5時

市長挨拶 市原市市長

開会の辞 生存科学研究所理事長

熊谷 洋

シンポジスト基調発言

1. はじめに一全体構成について

にあるということではなく、よりよい状態へ向かおうとすること。

「医療」とは健康づくり、健康増進を含めて言う、と規定した。

小林講師は、「家庭」の視点から実例を上げつつ、生れた時から心と体のプログラムができてきている。それがうまく動くのが健康である。家庭を中心にそのプログラムを、ソフトとハードの両面から健やかに育てていかなければならない。それにはハードなシステムだけでなくソフトなシステムが必要である。家庭の周囲に地域社会があり、その中に学校、病院、職場、行政等があって市民の生活を支えている。特にそのなかで情報の収集が大切で、乳幼児検診と学校検診のリンクや、地域におけるデータバンクが必要である、と述べた。

土屋講師は、産業保健の視点から、産業医は全人的医療をやる医師である。しかも作業環境だけでなく、「市民の環境を守る」という任務を持っている。市原市においては中小企業が多いので、そういう中小企業が協力して企業のコミュニティーを作って、その中で産業保健を推進していくべきである。そのためには医師会ももっと力を入れ、企業或は勤労者の健康教育を含めたシステムを作っていく必要がある、と述べた。

渡辺講師は、医師会の立場から、医療費が今後どんどん増加していくであろう中で検診データの総合化が必要である。それは子供のも、企業のも含めたものだが、問題は評価の際に健康度をどう扱うかである、と述べた。

江見講師は、経済の立場から、「健康投資」とはどういう意味か、色々例を上げながら、

結局、「福祉立地論」とか「地域特性」に応じた医療供給体制を作るべきであり、各年令層の健康には特徴があるからそれに従って健康投資を行うべきである。それにより、健やかに生れ、健やかに育ち、健やかに働き、健やかに老いるという、そういうベネフィットが帰ってくる、と述べた。

戸沼講師は、コメントで、専門の都市工学の立場と市民の立場から、市民と医師との関係のあり方、医師への不満等について述べ、また、非常に重要な問題であるアメニティーについても触れた。

内田講師は、地元の「医療協議会」の立場から、市原市の医療環境を、数値を上げながら、どうなっているかを説明し、高齢化率が非常に上がっている、それにたいして今から用意をしなければ間に合わない、と述べた。

その後の「討議」では、コスト・ベネフィットについては、ベネフィットの計り方が非常にむづかしいこと、健康の問題については市民の協力が必要であることが述べられた。

第2回 「市原市の地域特性と健康づくり」

矢口講師は、生存と地域特性について以下のように述べた。医学は進歩し、病気の治療は進むが、人間を丸ごとみることを見落とししているのではないか。人間である喜びと価値を考えることが急速に欠けてしまっている。科学技術は進んでいるが、それは人間を幸せにするか。文化が衰えるということは生存を貧しくする。世紀末的現象が溢れるなかで、我々は何をしたら良いのか。改めて生き方の点検をする必要があり、それには、一番身近な地域文化の見直しをすることが肝要である。千葉には文化、歴史、生き方、自然が豊

富で、特に農村には深い文化が根付いていた。都会と地方と両方を点検し、その良いところを選び、悪いところは捨て、次の世代へ残すことが我々の課題である。

向山講師は、産業活動と公害対策の経験者として、以下のように述べた。産業活動で環境が変わる、それをどうコントロールするかが問題であるが、要は調和が大切である。市原市の産業は大工場が経済的な主力を占めているが、従業員は下請けが多い。大工場が産業保健にもっと責任をもつべきである。現在環境基準は満たしており環境汚染は摺めるが、住民の健康への影響ははっきりしない。健康・医療のデータを総合的にまとめて地域環境との関係を明らかにする必要があり、統一した情報化が必要である。

草刈講師は、労働衛生の実践と行政の経験から、以下のように述べた。労働衛生に取り組む産業医には、地域医療との係わりが大切である。日本の場合、労働衛生の流れは結核対策から始まり、早期発見・管理・治療であったが、やがて事前の対策が重視され、作業環境の改善に取組み、現在は、低濃度長期暴露への対策と変わってきた。また高齢化で成人病有病率が増加し、有病者の救済から健康者へのケアと就業能力の保持増進が大切になってきた。全年令層への対策が必要である。

筑井講師は、専門は経済であるが、さらに広い立場から、以下のように述べた。産業化の歴史は人類の歴史から見れば極めて短い期間の出来事であり、産業の生存環境への影響はこの短い経験からでは将来の見通しはまだ解らない。産業と地域とは別々ではありえない。一体となって常に生存条件を見直す

必要がある。産業と地域住民の健康を長期的に予測して事前の対策を立てるという、予測医学が必要である。産業医と地域の医師が太いパイプ・ラインを作ること。広い視野から予測医学で地域医療に取り組み、保健医療システムを統合することが必要であり、産業も地域の健康に関心を持たなければならない。市原市は日本の縮図である。実のある健康のモデルが策定され、日本のモデルになるような意気込みで協力したい。

内田講師は、コメントで市原市の開業医と産業医活動について説明。

諏訪講師は、市原市医療協議会について説明。

中野講師は、市原市の産業医の状況の説明をした。

第3回 「市原市における地域包括医療システムのあり方」

開原講師は、情報科学の立場から、今は、良い「医療・健康システム」は一つの機関ではできない。だから、協力体制が大切である。しかし、現実に協力体制を作ることは大変むづかしい。連絡が悪く、調整役が必要となる。相互に協力させるメカニズムを作るとよいが、誰かがイニシアティブを取らなければならない。またそれには、相互に連絡を取る具体的方法をきちんと作る必要がある。それが情報だが、それを行政と医師会と住民の監督下に置くのが良い、と述べた。

弓倉講師は、医師会病院活動の経験をもとに、以下のように述べた。医療計画以前の問題として、体も環境も知り尽くしたかかりつけの医師をもつ事が大切である。それには主治医としての責任も重大となる。病院は、こ

れからは地域の中で計画的に運営されるべきであり、病院の医療技術は公開されなければならない。専門性を打ち出すことで主治医との連携もうまくいく。大学病院も地域のシステムのなかに入る必要があり、それが出来る権限をもったポストが必要である。住民の立場からもっと深層を見詰めて議論すれば変わってくるであろう。医師会は医療の専門集団である。責任をもって長期的な(少なくとも10年くらいの)計画を作る必要がある。開業医の守備能力を向上させることが、医療システムを良くする方向である。地域医療についての行政の役割は、物についての援助と、必要な資源の開発である。最後に、プライマリ・ケアセンターの設置を提言する。それは行政が作り医師会が運営する。将来は保健センターや老健施設と結んで、市内に強力なネットワークを作るのがよい。

藤本講師は、口腔保健の立場から、これまでの公衆衛生は病気の早期発見であったが、これからは健康増進であり、口腔衛生から口腔保健へと変わった。市原市は3才児の虫歯0が増加しており、既に改善は始まっている。今、きちんと組織化した活動をすれば更に改善できる。それには先ず、有効な教育活動による住民の意識改革と態度変容が必要で、行政の責任は重い。口腔衛生は人生の早期にやることが大切であり、また、心身の健康に関わっている。小・中学区を中心に保健活動を積極的にするべきである、と述べた。

師岡講師は、経営工学の立場から以下のように述べた。経済性工学の中の機会損失の概念は、戦後の日本の復興に貢献した。西独では医師の診断で温泉での休養が保険給付される。四国の今治ではクワ・ハウスに投資し

たが、資金の回収は容易であるという結果が出てきた。予防医療の先行投資は企業のTPMと同じ、経済性が高くなる。プロジェクトの推進は企業のTQCと同じで、サークル活動を町内会単位で、方針管理は市長や市議会で行うのが良い。このシンポジウムを具体的にするためには、市長の「健康都市宣言」でプロジェクトのキックオフをするのが良い。そして具体的に出来ることからプログラム化し、市民の参加を得ることが必要である。TQCにはデータが必要であり、健康に関するデータを収集することが大切であるが、健康に関しては3S:「整理・整頓・清掃」というような簡単なことからスタートするのが良い。

山口講師は、大阪府での医療協議会活動の経験から、包括医療推進の原点は、昭和38年の医療制度調査会の答申で提言された地域保健調査会構想である。その特色は地域特性の重視と住民参加であるが、この理念を基本として医療協議会が設置され、運営されれば、住民のニーズに応えつつ、医療資源の適正な開発・配分を具現できるであろう。医療協議会の運営を通じて今回のシンポジウムの意義が生かされ具体的施策となることを期待する、と述べ、大阪府での実践を例示した。そして、医療協議会の必要条件としては、条例化されたものであること。住民参加が大幅にあること。専門部会の研究・調査を重視すること。保健・医療・福祉資源等の実態と保健・医療・福祉の現実を対比して未来への施策を検討することである、と主張された。

内田講師は、コメントで、健康を失った老人のことも考える必要がある。これらの老人

を何処で引き受けるか。健康作りの最終段階を明るいものにしたい、と述べ、

諏訪講師は、市原市の医療の実情につき述べ、患者の枕元に来る医者のある医療制度はできないか、と問題を提起した。

討議では、市原市の市民病院の将来構想についての質問に答え、市原市地域包括医療システム検討委員から、現在生存研で検討中の経過が説明された。

●生存科学ビューポイント

エントロピーの法則

安房医師会副会長
梅園 忠

武見先生の、地球を細胞に例え、其の膜の代謝を示すモデルは余りにも有名である。

其の膜とは何か、と言えば、地球を覆う生態系という膜に付いて、私は1977年(昭和52年)の第4回日本医師会病院学会で言及した事が有る。太陽エネルギーは惑星系の全てのエネルギーの根源であるが、其の天体に生態系が成立しなければ太陽エネルギーを固定できない。月を見れば明らかである。

産業社会に成る前は一農耕文明では一此の生態系の中で生活エネルギーが生み出されたのである。

今日多くの人が生態系について関心を持つ様に成ったが、此と広義の医療—生存の条件追及—との関連については理解がもう一歩、というところでは無かろうか。

生態系の発育が理想状態であると其の系は開放式定常状態になり、エントロピーの増大は最低に押えられる。化石エネルギーの代謝ではエントロピーの増大は甚だしく、為に地球は温暖化を避けられない。

生存の理法を考える時、完全な生態系の活動は非常に低エントロピーである事を忘れてはなるまい。

とは言うものの「自然に還れ」という事は近代文明のアメニティーに慣れて仕舞った者には大変難しい。たんぼにどじょうやたにしが居るのが望ましいが、蚊やひるやあぶが居るのは困る、という生態学は余りに自分勝手(人間勝手)ではないのか。

又蚊帳に入る事に成ろうやも知れぬ。

馬が自分の頭をぶつけて蚊やあぶを追う為に、馬小屋に藁束が吊されて居るのを見て、良寛は早速草庵に藁束を吊した。子供達に、小さい藁束を手持てば?と教えられたと言う。いい話だと思う。

「遊びをせんとや生れけむ」と彼は言った。電気を消して、蚊帳の中から月見をするのも風流である。矢口光子先生の「文化」にはこういうのも含まれていると思う。

●エッセイズ・キュート

熱帯雨林の保護

地球をとりまく大気の温度が上がりつつ

ある——いわゆる「温室効果」については、

従来賛否両論があった。しかし、最近のデータを見ると、どうやら本物のようだ。その対策として熱帯雨林の保護が俄にクローズアップされてきたが、「トゥーレイト」という感じが否めない。

1967年、ボルネオ島サバ州に、ラワン材伐採の取材に行った。当時、積出し港のサンダカンから、現場に行くには道路がなかった。川をモーターボートで遡るのが、唯一のルートだった。われわれを乗せた船のエンジンが途中で故障し、このままでは海にまで流されるというピンチにおちいった。幸い、故障が直って伐採の現場に着いたが、宿舎とは名ばかり、野宿に近かった。

現場は、うっそうとした文字通り密林だったが、木材として使える樹は数十本に一本くらいしかないのに驚いた。一本のラワンの樹を切り倒すとき、周りの樹木も倒されている。サンダカンに戻ると、関係者は「このままのペースで伐採が進めば、そう遠からずボ

ルネオが裸の山になってしまう」と心配していた。熱帯雨林の破壊問題は、1967年にすでに存在したのだ。

その後、道路が建設され、伐採に拍車がかかって二十数年。結果は予測していた通りである。

最近、日本の海外青年協力隊が、アフリカで植林をしている話をきいた。周辺の林では住民がどんどん樹をきっているが、これが唯一の燃料だから止めようがないという。これではアフリカの砂漠化は防げない、と嘆く。

アマゾン流域の環境破壊も似た問題だ。アマゾン地帯を横断する道路の建設が進めば、世界最大の熱帯雨林が破壊され、生物の種の宝庫を失う。そして地球規模の気候変動を招く恐れがあるという。

問題は分かった。対策をたてる国際会議も活発だ。しかし、実行となると決め手がない。

(0)

維持会員だより

決定的瞬間

カルチエ・ブレッソン写真展を観た。『サンラザール駅裏』という作品の前には多勢の人が微笑みながら立っていた。水溜りの上を跳び越える男の空中のシルエット。次の瞬間には恐らく誰の目にもわかる水溜りに落ちてわ飛び散るであろう水。あるいは転倒して上衣もズボンもズブ濡れになるであろう一瞬前の画像だ。この時有名な「決定的瞬間」というカメラマニア愛好の言葉が生まれる。

この作家は市井の人々の日常生活を撮っ

東京 三枝靖夫

て写真芸術を創作する。どことなく開業医の活動と似て、好きだ。すべて人間を対象とする。数百ショットの連続撮影の中の一瞬一駒に作品を凝集する。まばたきの瞳の方向、体幹方向四肢の構えの停止、集団の中の動中の静というような決定的瞬間を作品の主題とする。凄い作品群だった。

決定的瞬間とは、日常の連続の中の一瞬。毎日の医療の枠の中で、患者の病状の一瞬の変化をとらえる。その瞬間の前後は、もう芸

術的価値のない駄作に似ている。

Yさんの場合がそうだった。寡婦で61才、小料理店を独りだから朝起きると酒だ。一日中醒めている間は、コップを片手にチビリチビリ焼酎の絶える時はない。飲むために働いて、働いて得たものは飲んでしまう。小柄で、くしゃみ顔。年配の客に愛想悪く、若者にサービスがよい、ひどい店だ。時々やけどや皮膚病で、お向いの果物屋O夫人に連れられて来院する。

ここ数ヵ月右季肋部痛があって胆石を疑い治療していた。肝機能検査に少々の変異値があっても、酒を止めることはない。楽しみは酒以外になかったからだ。医療管理指導を冗談でまぎらわしながら薬剤治療を続けていた。ある日突然腰痛に襲われた。救急病院に入院した。尿管結石だった。体外衝撃波破砕療法を受けて、三週間後に退院した。勿論三週間は禁酒だった。退院から10日後O夫人に付添われて来院した。どうも様子が変わったという。喋らないし快活さが失せたという。問診すると、オリエンテーションは確からしい。冗談をいえば笑いもする。アパティッシュデはないが、いつもの顔つきではない。視線を外らして机の角を指でなでたりしている。自分からは発言しない。30秒以上も沈黙が続く。——これは鬱病だ。毎日の酒を断たれて、三週間は非業に似た不満の日々だったに違いない。「酒は大いに飲んでいいよ」と対策をO夫人に話し、禁断現象もあるだろうから特に自殺を予防するように注意した。結石は癒えたが、Yさんの心は閉じたままになった。カウンセラーが必要だが、酒は一合しか許されない。客の足は遠のいた。店から酔いと笑いが消えた。妹さんがきて田舎の村に連れ

て帰った。精神病ではなく脳梗塞と発表されて、Yさんは幽閉された。

「ウツ」と診断したことの決定的瞬間は、誤りなかりしか。正しかつたであろうか。藤沢正輝著『診断工学』の手法によれば、カオスから、情報処理仮説設立医師の勘判断力診断決定というプロセスの到達だったと思う。特に医師の勘、これは個別的な隠喩の組立てと連想によって働くものではなかろうか。勘は医学講義生活文化政治経済リベラルアーツ武見のメタルヘルス斗争勝負事にいたるすべての経験と記憶と潜在意識を背景にもつ。つまり出来るかぎりの隠喩を一斉に呼び起こして連想の彩とし、映像に解説を重ねて診断を決定したつもりである。(勘すなわち直感を敷衍すればこうなる)

陽気と希望の欠如、感情的意気消沈、(depressed area, inward displacement, decrease of function activity)。これで「ウツ」としたのではなかったか。Yさんを胆石として治療していて腎石とされたことは、Yさんにとって誤診という医療への不信を抱かせなかつただろうか。と思うと一瞬飛矢は停止した。どうも芸術的作品としては自信に不足。駄作とすると自虐的に「ユウウツ」になる。

* * * *

寄付の御紹介

寄付

谷 信正

¥1,000,000.-

ニュース・オブ・ニュース

研究所日報

- 9月7日 第4回市原市地域包括医療システム検討委員会
- 9月9日 宗像医師会 訪問
- 9月10日 アルメイダ病院開設20周年記念式典 出席
- 9月11日 北九州市医師会 訪問
同 福岡県医師会 訪問
- 9月14日 第2回市原市「市民の健康づくり計画」シンポジウム
- 9月21日 第5回市原市地域包括医療システム検討委員会
- 9月28日 第3回市原市「市民のための健康づくり計画」シンポジウム
- 10月5日 第6回市原市地域包括医療システム検討委員会・病院班会議
- 10月10日 ハーバード大学ゴールドマン教授来所
- 10月11日 「住民・文化・社会」研究委員会
- 10月12日 総合健康問題研究委員会・総合委員会

* * * *

アルメイダ病院開設20周年記念式典

9月10日(日)、大分市医師会立アルメイダ病院開設並びに研修会館完成記念式典にお招きを受け、研究所熊谷洋理事長他役員数名が参加した。地域包括医療を総合健康問題という形で実践的に研究している生存科学研究所と、医師会病院活動を軸に包括的な地域医

療を展開している大分市医会とは同じ理想を目指しているといえる。熊谷理事長は懇親会の席上、「皆で生存科学を真剣に考えよう」と強く呼び掛けられた。

この機会に、前日の9日には福岡県の宗像医師会を、翌日の11日には北九州市医師会と福岡県医師会を、小平専務理事他の役員が訪問し、日頃の協力への御礼を述べ、生存研の研究状況の説明、並びに新たな地域包括医療・総合健康問題の協同研究の推進や講演会の開催等について会談した。

* * * *

ハーバード大学ゴールドマン教授来所

10月10日(火)、ハーバード大学医学部臨床薬理学科のピーター・ゴールドマン教授が生存科学研究所を訪れ、医薬問題の現状と、これらの研究について粕谷、藤野、開原教授、小平専務理事他と会談した。このような問題の話し合いの場がこれからも出来るだけ持たれることが期待される。

* * * *

市原市「市民の健康づくり計画」シンポジウムについては本文に掲載。

公益信託武見記念生存科学研究基金ニュース

基金日報

9月30日	第47回生存科学研究会
同	武見医政の理論と実証研究分科会
10月7日	武見フェロー選考委員会
10月12日	第1回表彰助成委員会
10月21日	生存科学研究会平成元年度分科会
10月28日	第5回医薬品産業組織のあり方研究会

* * * *

武見フェロー選考委員会

10月7日(土)午後、日本から推薦する平成2年度武見フェローを選考するための委員会が研究所会議室において開催され、フェローの募集について協議し、その準備が始まった。選考委員会は、委員長藤野教授、副委員長開原教授として作業している。なお本年度のフェロー、帝京大学医学部小林廉毅氏は既にハーバード大学で研究に従事している。

* * * *

平成元年度第1回表彰助成委員会

武見記念賞・武見奨励賞の授賞者を推薦するための委員会である表彰助成委員会の、平成元年度第1回会合が、10月12日研究所会議室において開催された。今年度は武見記念賞

を授賞する年であり、その被推薦者の選考について協議された。

* * * *

生存科学研究会平成元年度第一回分科会

昨年度の生存科学研究会分科会は極めて活発な研究活動を行い、それを手掛かりに研究所では今年度の新しい研究体制を確立したといえる。分科会での研究課題がそのまま研究所自主研究に取り入れられたものもあり、従って、今後の分科会のあり方は今迄と違う運営が必要となった。生存科学研究会や研究所の自主研究との研究重複を避けながら、それらがカバーしきれない部分や新しい発想・視点からの研究、新に対応を求められる問題の研究等について、会員の自由な、自発的な参加による研究の場とすべく、第1回の会合が10月21日(土)午後2時から、研究所会議室で開催され、今後の研究の進め方について活発に討議された。

お知らせ

第48回生存科学研究会

日時：平成元年11月25日（土）

午後2時～4時半

場所：大手町 農協ホール第2中会議室

I. 「生存環境と生存科学」シリーズ第4回
テーマ：「発展途上国における産業化と
環境問題」

講師：元アフリカ経済委員会顧問、
元WHO顧問 大瀬貴光

概要

- 1) 産業開発を阻害する風土病の種類、及びその例
- 2) これらの疾病に対する考え方
 - a. Ecosystem for human population ;
 - b. Ecosystem for pathogens ; &
 - c. Ecosystem for vector animals.Combination of a, b and c.
- 3) 開発による環境変化のEcosystemに対する影響、その予測評価 (assessment)
例：南トルコのIrrigation scheme ;
Kagera河流域開発計画
- 4) 開発計画の立案
農業に於ける殺虫剤使用の歴史
Volta河 Onchocerciasis Programme ;
World Bank
- 5) 環境安全化—衛生状態向上の生む危険
人口重圧—過剰牧畜→砂漠化

開発は美徳か罪悪か？

- 6) 開発に便乗する市場支配
ナイジェリアにおける小麦作戦

II. 「米国のバイオエシックス研究動向と
生存科学

—ケネディ研究所に学んで—

講師：産業医科大学医学概論教室助手
大林雅彦

[注]今回も開催日と場所が定例と変わりましたので、御注意ください。

編集後記

早いもので、平成元年の最後の号になってしまいました。今年は国際的に地球環境の破壊が問題になりました。経済に絡んでの摩擦はまだ沢山ありますが、人類がより健全な生存に向かって協力しようとの合意は強くなったといえましょう。これで世界の国際的協力が進捗するようにと願われます。そうであれば、益々科学的な基盤に立った総合的政策が必要になり、人類の生存をマクロ・ミクロの視点から、構造的・機能的に研究する生存科学の必要も切実なものとなります。(N)